

中濱地蔵尊の造立

地蔵菩薩の真言

「おん かかかび さんまえい そわか」

別府市千代町中浜筋商店街のほゞ中央に、桃山建築様式を思わせる立派なお堂がある。その中に、石造の地蔵菩薩が奉祀されている。土地の名を付けて中浜地蔵尊と呼び、多くの信者を持ち、香煙の絶えることのないほどご発効している。地蔵尊の呼称は地区のシンボルを意味



するもので、このお地蔵さんは中浜地区のシンボルである。

安部 和也

中浜地蔵尊には、今は亡き著名な郷土史家F氏の執筆による「中浜地蔵尊由来記」がある。この箱書きが昭和十七年八月縁日となっているので、同年に作られたものと思われる。その由来記を要約すると、

中浜地蔵尊は、一四〇〇年以前の第三十代敏達天皇の十二年（五八六）、日羅法師が豊後に来たりて中浜の里道に奉祀したものである。

佐藤太郎右衛門尉貞茂が慶長の大地震（一五九六）の後、中浜地蔵尊の傍らに草庵を営み、犠牲者の冥福を祈るために日夜念仏修業を行なった。

地蔵尊はもともと野仏として雨露に曝されていたが、文化十一年（一八一四）に地蔵堂が建立されて堂内に安

置された。の三点にしばらくられる。

そこで、由来記に記されている日羅と佐藤太郎右衛門尉貞茂の両人物について検討してみる。

由来記では、地藏尊を奉祀したのは日羅法師となつてゐる。しかしながら、日本書紀によると、敏達天皇の十二年十月、百済国の高官に仕官していた日羅は天皇の命に従つて帰国したが、十二月晦日に百済から連れてきた隨臣によつて暗殺されたという。帰国から殺されるまでの二カ月の短期間に、別府に来られただろうか。当時としては全く不可能なことであろう。

県下寺院の創建、磨崖仏の彫刻については、県北の国東・宇佐・速見方面では仁聞菩薩伝説、中部の大分・大野方面では日羅伝説、県南の臼杵方面では蓮城法師伝説が定着している。とくに、日羅伝説が大野川流域に存在するのは、密教修験者が阿蘇大神宮西巖寺を本拠として勝軍地藏（日羅）を尊奉して、大野川沿いに霊地・霊山を創り、仏教文化の日羅圏を形成したためと『豊後磨崖仏散歩』に見える。

日羅法師による中浜地藏の奉祀は、日羅伝説にもとづ

いて作られたものと思われる。ただし、日羅は由来記では法師となつてゐるが百済国の行政官で法師ではない。

つぎに、慶長の大地震の後、中浜地藏尊で日夜念仏を唱えて犠牲者の霊を弔い、得度して僧となつた佐藤太郎右衛門尉貞茂は実在したか考えてみたい。

由来記によると貞茂は、寛永十三年（一六三六）に八六歳で没している。しかし、元和八年（一六二二）につくられた当時の戸籍簿とも言える「小倉藩人畜改帳」には、別府村、浜脇村には該当する人物は見当らない。江戸時代には、浜脇村の百姓が村を離れるときにはその庄屋の許を、別府村に移住するには別府村の庄屋の許を必要とし、両庄屋ともに代官の許可を得なければならなかつたことである。他村に移住するということは、現在では想像もつかぬ大事件であつたはずである。

また、年貢を納める地主百姓を増やして、公領私領ともに年貢増徴政策を執つていた時代に、浜脇村の百姓が居村を離れて別府村で読経に明け暮れることが、はたして許されたであろうか。百姓が土地に縛り付けられていた時代にある。

また、鎌倉時代以前、現在の旧市街地はもともと浜脇湾の海底であった。その後たび重なる土石流や泥流で次第に埋まって扇状地形が作られたもので、その末端は十六世紀後半には、秋葉神社の前を南北に走る旧往還道路の線であった。それが、慶長三年（一五九八）の鶴見山の崩壊によって湾が埋まって出来た砂丘が、北浜、中浜、南浜と呼ばれた海岸の土地であるといわれている。したがって、中浜の土地は慶長三年以降に出来た土地ということになり、六世紀、この場所に日羅が地藏菩薩を奉祀することは出来ないことになる。

中浜地藏尊の誕生を説明するには、地藏尊とはどんな仏で、その信仰はいつどこで始まり、どのような過程を経て発達し、何の目的で菩薩像の造立がなされたかを調べた上で解き明かさないと、真実の説明にはならない。

そこで、地藏尊造立の謎を、地藏信仰と石仏、地藏尊誕生とに分けて説明してみる。

地藏信仰と石仏

地藏菩薩とは釈迦入滅後、五六億七千万年後に弥勒菩

薩が出生するが、それまでの間、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を夜となく昼となく逡巡して、闇黒世界にもがき苦しむ衆生の救済を、ひたすら努められる慈悲深い菩薩様である。

地藏信仰の起りは唐の永徽四年（六五三）で、八世紀に日本に伝来、日本版地藏菩薩十王経が作られて日本の地藏信仰が普及したといわれている。

『扶桑日記』には、宇佐八幡神は「地藏菩薩」と称したと、次のように記されている。

「宇佐八幡神は宝亀八年（七七七）出家する」。仏教に帰依した八幡神は自在王菩薩（地藏菩薩）と称す」と。

この『扶桑日記』を信じると八世紀の後半、宇佐八幡宮に地藏信仰が入ってきたことになるのではあるまいか。中浜地藏尊の奉祀が由来記に記されているとおりとすれば、唐で地藏信仰が起る六十七年前に、すでに別府の地で地藏信仰が行なわれていたことになる。仏教史・日本史における地藏信仰発祥の地を別府に書替えないければならないことになる。

地藏信仰の基となった地藏菩薩十王経とは、「人間は

死すと肉体はこの世に残るが、魂はあの世に行き閻魔大王の前で初七日から四九日に至る七日毎の七回と、百ヶ日・一年忌・三年忌の計一〇回にわたって、生前の所業について罪状有無の裁判を受けなければならない。裁判の結果罪なき者は極楽に、有罪者は浮ぶ瀬の無い地獄に送られ、その拷問にもがき苦しまなければならないが、地蔵菩薩にお縊がりすれば必ず地獄より救済してくださる」との教えである。

一三世紀に造られたとする臼杵石仏の堂ヶ迫十王群がこの裁判の場を磨崖仏で表している。岸壁の中央に裁判長の地蔵菩薩（閻魔大王は地蔵菩薩の化身）が一際大きく刻まれており、左右には衣冠束帯を着けた険しい顔で笏を持ち威儀を正した裁判官の仏一〇体（十王）が刻まれている。ここの地蔵菩薩像は左手を膝上にして宝珠を持ち、右手は胸前に立て与願印を結び、右足は組み左足は下げて腰掛けた半跏の姿である。この姿型こそ地蔵菩薩像の原形と言われている。

わが国で仏像が造られたのは飛鳥時代（七世紀）の金

銅仏が始まりで、それに木彫仏が加わり、奈良時代（八世紀）になって塑像・乾漆像が発達、平安朝時代（九世紀）に木彫仏の全盛期を迎える。

石仏の造仏は、奈良時代が始めとされているが、それは奈良地区に限定されたことで、その数は極めて少ない。平安後期（一二世紀）になって活発に造られ始め、鎌倉時代、室町時代、江戸時代へと発達していくのである。石仏は造仏年代によってその姿型、彫刻手法が大きく異なり、平安時代の石仏は木彫仏師が平ノミを使って軟岩に造仏する磨崖仏が主体をなし、鎌倉時代（一三世紀）になると、やや硬質の石材を使いこなす技術の進歩と彫刻刀の改良によって、彫刻に適した軟岩、割石、板石に線彫り、浮き彫りの手法で本格的仏師による造仏が行なわれた。江戸時代（一七世紀）になると石工が石山で荒削りを行なった後、作業所または造立場所に運んで丸彫りの造仏が行なわれるようになった。

中浜地蔵尊の材質は石造り、彫刻は丸彫り、姿型は立像（両手は破損して印相・宝珠は不明）であり、これらを総合して考えると、江戸時代に入ってから造立と思

われる。

県下の石造地藏菩薩像の内、丸彫り立像で造立年号が判っている地藏菩薩像を見ると、野津町宮原迫の地藏菩薩像は寛保二年（一七四二）、中浜地藏尊と姿型、材質とも全く同一であると由来記に記されている大分市生石霊雲寺の生石地藏菩薩像は寛政十一年（一七九九）、真玉町大岩屋応曆寺の地藏菩薩像は元治元年（一八六四）で、共に一八世紀以降の造立である。国東半島には凝灰岩や安山岩が豊富で、彫刻に適した石材が古くから産出されており、特に田染石は有名であった。

記録によると江戸時代に国東より比叡山に上り教学と工芸技術を学び、法橋位に叙せられた二名の石工が修業の後、国東に帰り数多くの後継者を養成している。別府よりほど遠からぬ国東の地に、よい用材と優れた技術者がいたことは、石仏造立に別府の地は恵まれていたと言える。

文化年間（一九世紀初期）に仏像彫刻師として活躍した石工守屋貞治が書き残した「石仏菩薩細工帳」によると、高さ八九センチの地藏菩薩像一体を彫刻するだけで、

延べ一四一日を要し、費用は石材切り出しから彫刻に至るまで、二三両二分二朱かかったことが記録されている（当時百姓一人当たり一年間の生活費は米一石、金に換算すると一両と言われていた）。江戸時代（一七世紀より一八世紀）は墓として石塔が建てられるのは、庄屋クラスに限られていたという社会的制約（大分合同新聞朝刊「真玉町向畑遺蹟」）が存在していた。

石仏造立には石塔以上の制約があったと想像されるので、造立にはそれ相当の家格と、当時としては想像をはるかに超える大金がかかり、百姓だれもが自由勝手に造立することが出来なかったと思われる。

石仏は祀るために造られ、拜むべきものとして立てられ、ずっと崇拜されてきた。造る人、祀る人、拜む人が主役であり、主役（施主）の願いは死者への供養と何らかの祈願を達成することが目的であった。地藏信仰の当初（八世紀）は、貴族が死後の極楽浄土行きを願っての信仰であった。鎌倉時代（一二世紀）になると、武士は一族一統の繁栄を、また僧侶は菩薩行の完成を祈願し成就することを念願しての信仰となり、地藏菩薩像の造立

が流行した。

江戸時代になって百姓の間にも信仰は広がった。死者への追善供養と火除・盗難除・病氣平癒の祈願成就を願う地蔵菩薩像の造立が盛んに行なわれ、「お地藏さん」の黄金時代を迎えるのである。

中浜地藏尊の誕生

古い地藏菩薩像が造立されている場所をみると、そこが人里離れた神社仏閣の境内・墓地・洞窟・峠・辻・過去の災害地などの宗教的霊地と思われる地に多くの造立がなされている。造立場所は過去に宗教的な関わりがあった場所であると断定できるのではないだろうか。

中浜の地の宗教的関わりを探すことによって、何時、何の目的で、誰が地藏菩薩像を造立したかの謎を説明することが出来ると思う。

中浜の宗教的関わりで、地藏尊の造立を発願させるほどの災害となると、慶長三年の鶴見岳大崩壊による土石流で、久光村の村人四〇余人が犠牲になったこと以外には考えられない。したがって、地藏尊の造立は、慶長三

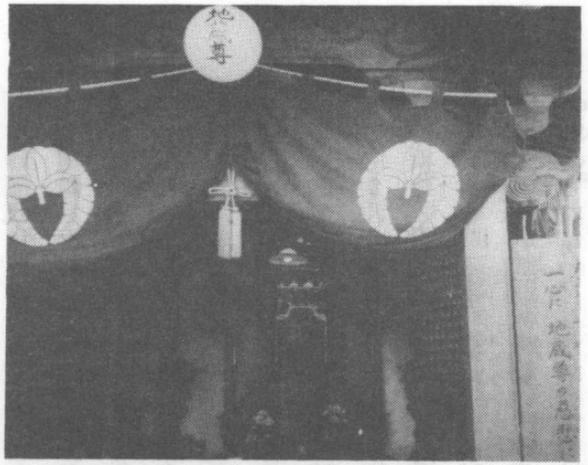
年以前の造立はありえない。

造立の目的は、かの大水害で不慮の死を遂げた久光村の犠牲者の追善供養を、目的としたとするのがもっとも妥当であると考えるが、「なにが、造立を発起させたのか」その原因が判らないかぎり、造立の真相は解明できない。

享保一〇年（一七二五）の海門寺記の、仲町の秋葉神社由来によれば、その頃別府村でしばしば火災が発生して住民が困窮していたので、享保九年に堀助丞吉秋が、阿岐（安芸）より防火の神秋葉正一位大権現を奉載して、秋葉神社を創建したとある。

当時火災が多発するのは祟りによると考えたのではないだろうか。その祟りは、慶長の大水害で不慮の死を遂げた犠牲者の霊によると考えて、祟りの火災を鎮めるために火除け地藏の地藏菩薩を造立して、犠牲者の追善供養を行なったと考えられる。

しかし、石造仏像の造立には、それ相当の家格と財力が伴わなければ出来ないことは前記した。地藏尊の幕には古くより「下がり藤」の紋が使われている。このこと



は、施主は同じ家紋と断定できる。「下がり藤」の家紋で庄屋階級、しかも財力のある分限者を、先にあげた「小倉藩人畜改帳」より探すと、佐藤与兵衛家が候補にあがる。亡郷土史家堀博忠氏が同人誌「学と文芸」に発表された論述によると、与兵衛は世襲名で、大友家豊後改易の後に別府の

統治者となった細川藩士松井佐渡守康之によって、大庄屋堀助丞を補佐監督する目付けに任じられ、廃藩置県に至までの間、捨扶持を給されていたことになっている。これはともかくとして同家には、現在一番古いもので慶長一七年（一六一二）祐言信士の墓石をはじめ、明治一〇年に至るまでの墓石一〇七基を野口墓地にもっている。檀那寺臨濟宗崇福寺に現存する「万霊帳」は、明暦

元年（一六五五）月桂妙秋信女 別府与兵衛母との記入で始まっておりま、諡号の居士は正徳元年（一七一一）祐悦居士に贈られている。墓石・万霊帳・諡号で判るようにな相当な家格をもった家である。

一 与兵衛 歳三八 下人弥三郎 歳三三

女房 歳三五 下人喜四郎 歳四八

女子おい 歳八ツ 下人弥七郎 歳式五

親喜衛門慰 歳六拾 下人源五郎 歳式七

女房 歳四八

牛 三足

馬 壹疋

「小倉藩人畜改帳」

右のように、「かこ」（船頭）で下男・名子を六人牛馬四匹をもった、別府村では五指に入る分限者であった。

また、市立図書館の古文書のなかに、嘉永二年（一八四九）の八四両の貸付証文があり、同家の財力を示している。これらの史料から考えると、同家が地蔵尊の施主の資格を十分に備えていたことが立証される。

同家が「かこ」で仲町に居住しているということは、久光村の生き残りと考えられる。久光村の生き残りの者は、往還道路の山側に新しい邑（北町、本町、仲町、南町）をつくり住んだといわれている。

享保九年に頻繁におこった火災は、犠牲となった先祖の霊を子孫の者が供養をしない崇りと考え、もとの久光村の一遇（中浜）に地藏菩薩像を造立して、先祖の追善供養と火伏せの願と、板子一枚下は地獄の「かこ」稼業の航海安全をもあわせて祈願したものと思う。地藏尊は古記録に記載がない。公の記録にないということは、地藏尊はもともと個人の念持仏であったのではないだろうか。

秋葉通りの日豊線ガード下付近から海岸を望むと、海岸に向かって下り傾斜の道路が、サザンクロス付近より再び上り傾斜になり、中浜地区が高台になっているのがよく判る。防潮ブロックが浜町海岸に設置される以前は、台風が満潮時と重なると海水が排水溝を逆流して、銀天街一帯が水浸しになっても中浜には海水の侵入がなかった。中浜の土地が周囲より一段高いことがよく判った。それは、現在の中浜地藏堂一帯の地は、浜脇湾に浮かん

でいた久光村の旧跡を残した土地の一部であることが考えられる。

以上述べてきた仮説を組み立てると次のようになる。

秋葉神社が創建された享保九年に、仲町の佐藤与兵衛は頻繁に起こる火災が、慶長三年の大水害による久光村の犠牲者の霊を供養しなかった崇りによるものと考え、久光村の旧跡中浜の地に犠牲者の追善供養のために地藏尊像を造立して、火除けと航海の安全を祈願したのが、今日の中浜地藏尊である。

信仰で大切なことは、仏を造った人、祀った人、祈った人即ち施主の意志を後世の人が尊重することにある。

「真実は一つ、それは仮説から出発する。」との歴史学者の言葉に随って、少しでも真実に近づきたいとの願いで、仮説をあえて問うた次第である。

【参考資料】中浜地藏尊由来記 日本のお像大百科 大分の石造美術 日本のお石仏 大分の庶民仏教 国東文化と石仏 沈んだ島 国東半島の石仏 日本のお石事典 大分の歴史事典日本の宗教史 豊後磨崖仏散歩 仏像のみかた 別大公開講座 ニューライフ文化財講座 他